

大学博物館における学生作品の展示について

— 企画展「布、再びみたび」報告 —

三友 晶子

Report on collaboration with students in the exhibition

‘Nuno, hutatabi mitabi (Cloths, again and again)’ at Tokyo Kasei University Museum

Shoko MITOMO

1. はじめに

東京家政大学博物館では平成21年度春の企画展として「布、再びみたびー刺し子からエコアートまで」(会期：平成21年5月15日～6月10日)を開催した。本展の主たる目的は、環境悪化が抜き差しならない問題となっている今、環境に配慮したエコロジー活動への関心がますます高まっている状況を受け、この「エコ」を一時のブームで終わらせず、物を大切にすることと布や衣服を通して根幹から見つめ直すことにあった。「布の再生」という視点から、刺し子や裂織さきおり、寄裂よせぎれといった布を繰り返し使い尽くす古くからの知恵や技とともに、現代の取り組みとして本学の学生・卒業生による古着や廃材を利用した作品を展示紹介した。

来館者からは「時機を捉えた企画で興味深く観覧した」「考えさせられる内容で自分でも何かしようと思った」等の様々な感想をいただいた。その中でも特に反響が大きかったのは学生の作品であった。来館者アンケート¹⁾を見ると、学生からは「同級生や先輩の作品を見て大きな刺激になった」「博物館により親しみを感じた」という意見が目立つ。また、一般来館者からは、「家政大の学生がどのようなことを勉強しているのか分かった」「若い人が真剣に物事を考え実践しているのを見て頼もしく思った」等の好意的な意見が寄せられた。

このような意見・感想からも端的にうかがえるように、本展は、学生とその指導にあたられた教員の協力なくしては成立しなかった。もちろん、大学博物館である当館の展示は全て多かれ少なかれそうした要素を持っている。しかしながら、本展は特にその性格が色濃く、また当館の今後の活動方針への示唆を多く含んでいるという感触を得た。そこで本稿では、学生とのコラボレーションの場として「布、再びみたび」展を振り返り、大学博物館の企画展における学生作品の展示の意義について考えてみたい。



写真1 企画展「布、再びみたびー刺し子からエコアートまで」展示風景

2. 「布、再びみたび」展における学生作品の位置づけ

まず、「布、再びみたび」展の構成と、その中での学生作品の位置づけについて述べたい。

本展では「布の再生」というテーマに合った資料を選び、展示した。そのため、資料の製作・使用時期や形態は様々で、ともすると関連性のない物が雑多に並んでいるという印象を与えかねない。そこで、展示を三部構成にし、各部の区切りを明確にすることで、種類や雰囲気異なる資料が隣り合うことへの違和感を無くし、かつ観覧者が展示のストーリーに沿って鑑賞できるようにした。

各部のタイトルと主な資料、趣旨、また展示配置図を以下に示す。

第一部 「もったいない」が生んだ美・技・知恵

刺し子、裂織、寄裂の着物等

布が貴重品だった時代に日々の生活のなかで鍛えられた、布を継ぎ・刺し・裂いて再利用する知恵と技を紹介。用から生まれた美、またそこから^{にじ}しみ出る人々の布への愛着を通して、布と人との関係を見つめ直す。

第二部 布が貴重だった頃ーちょっと昔の衣生活から

- ・農家で織られた「うち織^{おり}」の着物とその布地を保存する目的で製作されたミニチュア
- ・戦時下の衣生活…衣料切符、更生服（大島紬のモンペ）等
- ・洗い張り、湯のし等

大量生産・大量消費型社会が到来する以前の衣生活を紹介。衣服の調達と管理に費やされた膨大な時間と労力、また、太平洋戦争中の半ば人為的に引き起こされた「布は貴重品である」という状態を物語る資料を展示することで、今忘れられかけている布の有り難みを提示する。

第三部 捨てるか、活かすかー衣と布のエコロジー

- ・造形表現学科の学生による「デニムの耳」（後に詳述）を使った作品

- ・服飾美術学科の学生による古着等のリメイク作品「リサイクチュール」
- ・衣料リサイクルの一例…マテリアルリサイクル、ペットボトルリサイクル

ここ数年、環境に配慮した「エコ」活動は、社会や個人のレベルでも広がりを見せている。そのような取り組みのひとつとして、本学の学生による作品等を紹介。自分の興味や専門分野に引き寄せることで、主体的かつ具体的にエコを実践し続ける道を探ろうという試み。

このように、学生作品は現代の布の再生をテーマにした第三部で展示した。例外として、江戸後期から大正初期にかけて主に東北地方で発達した「刺し子」や「菱刺し」の技法を用いた作品《sashico》については、第一部で伝統的な刺し子とともに紹介した。

今回は、環境問題という今日的かつ長期的な課題をテーマに含んでいることもあり、博物館で扱ういわゆる「古い物」「昔の物」だけでなく、「今」の物を展示することで展示の意図がより明確になるのではないかと考えた。特に、様々なことを学びつつ、新たな感覚で制作に励んでいる学生の作品は、温故知新の言葉どおり過去と現在を結びつけるものであり、未完成なところもまた「今後」を感じさせると捉えれば、本展に最適な展示資料であり、展示の主要な構成要素となった。

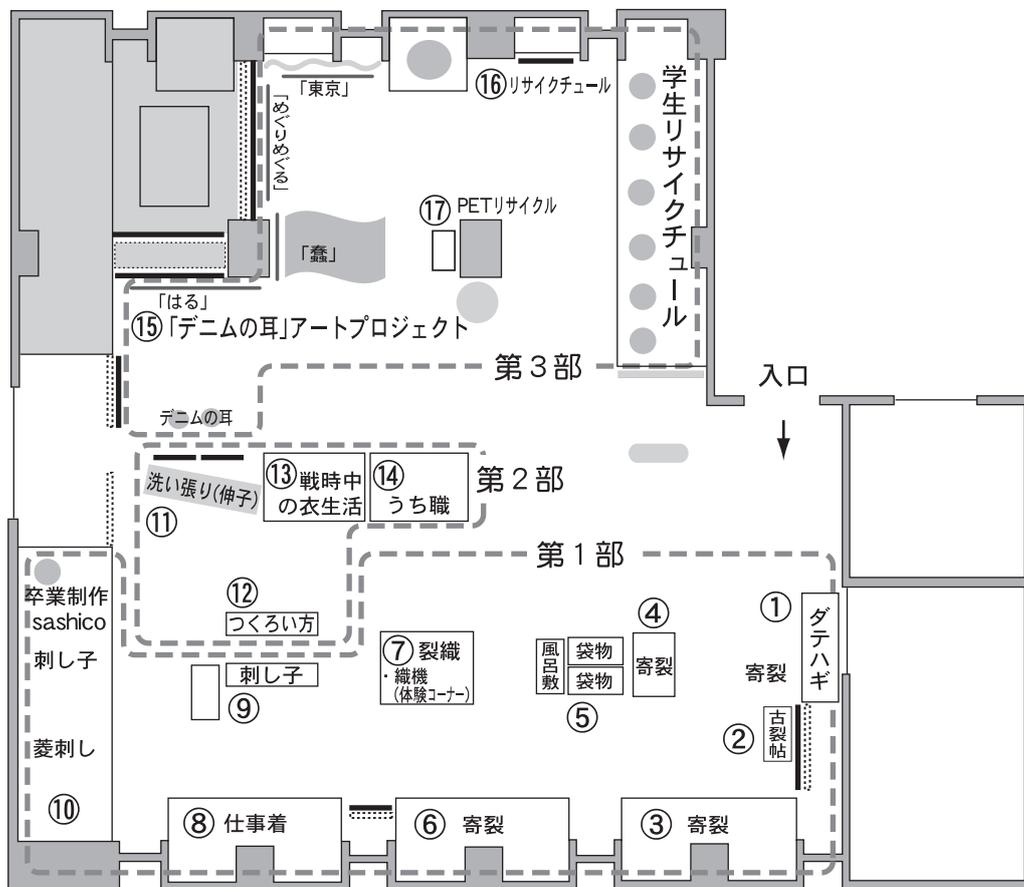


図1 展示配置図

3. 学生作品について

ここまで「学生作品」と一括りに述べてきたが、次のとおり、所属学科、出展の経緯等の異なる3種類の作品がある。

- ①造形表現学科学生有志による「デニムの耳 アートプロジェクト」
- ②服飾美術学科学生による「リサイクチュール」
- ③造形表現学科平成20年度卒業制作より《sashico》

以下でそれぞれについて詳しく見ていく。

(1) 「デニムの耳 アートプロジェクト」からの作品

1) 概要

「デニムの耳」とは、高速織機でデニムを織る際に生地にはゆがみが生じないように丈夫に織られた布の両端部分のことで、出荷時に切り取られ、緩衝材として二次利用されることもあるが、多くは廃棄される。日本国内での廃棄量は、一日20万メートル、一年間では地球二周分近くにまでなるといふ。²⁾

この「デニムの耳」を新しい素材としてとらえ、活用しようという取り組みが、株式会社トム柳田信之氏、宮坂義道氏を中心に「デニムの耳プロジェクト」として2007年に始動した。このプロジェクトの趣意に賛同した本学造形表現学科の学生が、藤岡薫子教授（織物研究室）の指導のもと、デニムの耳を素材として制作を行った。これが「デニムの耳 アートプロジェクト」である。平成20年9月にはグループ展「16人の青」で作品を発表している。

「布、再びみたび」展では、「16人の青」展に出品された6作品のうち、当館の展示スペース等の関係で、4作品を展示した。



写真2 展示写真「デニムの耳 アートプロジェクト」

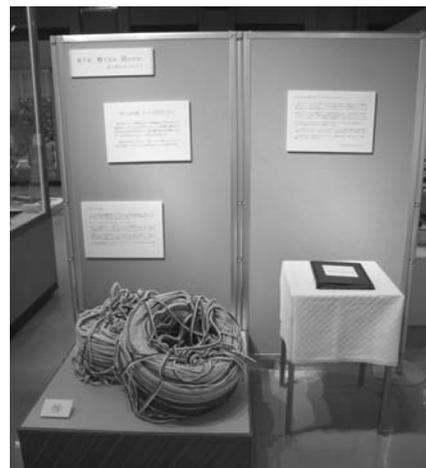


写真3 デニムの耳

大学博物館における学生作品の展示について

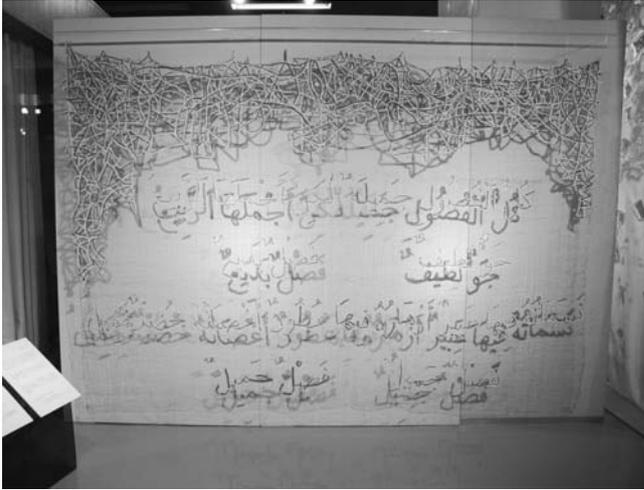


写真4



写真5



写真6



写真7

写真4：《はる～アラビア語の歌詞より》 塩川デニズ(平成16年度造形表現学科卒)

写真5：《蠡 - UGOMEKU》 渋沢久実子、長岡裕美、渡辺夕里子

写真6：《めぐりめぐる》 橘田由香、佐々木舞、武井希瞳佳、原野小百合、保坂麻友

写真7：《東京》 田島佐恵、田中祐子、新後志穂(以上、平成20年度造形表現学科卒)

2) 展示方法

織物研究室を通して作品を借用し、搬入は制作者が行った。搬入時に資料の取り扱い方法や展示の注意点を確認し、展示作業は博物館員が行った。

作品解説については、「16人の青」展で使用した作品ファイルを織物研究室より借用し、来館者が自由に閲覧できるようにした。また、本展のテーマに沿った質問〔①最も苦勞した点・見てほしい点 ②デニムの耳 アートプロジェクト〕に参加した動機 ③制作を通して、エコに対する考え方あるいはアートに対する姿勢に変化はあったか?〕について制作者に回答してもらい、それをパネル化して作品の傍に設置した。

3) 来館者の感想

以下に、来館者アンケートの自由回答欄に寄せられた「デニムの耳 アートプロジェクト」への感想を一部紹介する。

[一般]

20代：デニムの耳であんな細やかな表現が出来ることを知って驚きました。デニムは本来かたい生地であるのに作品では柔らかい印象が感じとられました。

50代：今の学生さんが作ったデニムの耳アートの力作に拍手を送ります。

50代：もう少し詳しく、また大きくとりあげても良いのではないだろうか。面白い！

50代：大変よかったです。もったいないの心にも通じているようで、大変うれしく見せて頂きました。(同様多数)

60代：更に活かす道を考えて実用化できるといいと思いました。(同様多数)

70以上：作品に大変驚きました。若い方達の新しい発想に感心致しました。デニムの耳でこんなに沢山の楽しい物が出来るなんて。私も今日は見学してラッキーと思いました。

[本学学生]

高校1年：あふれるセンスに感動しました！(同様多数)

造表2年：新しい作品価値があり、ユニークで面白かったので、若干スペースを広くし、他の作品も見学したかったです。

造表4年：本展に関連する先輩の作品が興味深かったです。「デニムの耳」の話は初めて知った事で、まだ多くの可能性を持った素材になり得る廃棄物があるのだろうと思います。リサイクルに対する意識が高まった気がします。(同様多数)

服美4年：デニムの耳も捨てられるだけではなく、新たな命を吹き込むことで芸術品が世に出るのだなと思った。

環境3年：エコ+アートがうまく融合されていて面白い。

4) まとめ

「デニムの耳 アートプロジェクト」には明確なコンセプトがあり、かつ具体的な実践が魅力的な作品に直結する点は、本展の目指すところそのものであった。これまで学生の個展やグループ展にまで目を向けたことはなかったが、身近でこのような活動が行われていることを見逃さないよう、今後情報収集等を心がけたい。

今回展示した作品は、「16人の青」展のほか、大学7号館1階でも一点一点一定期間展示されており、作品のサイズや雰囲気等を事前に知ることができた。出展歴のある作品は、展示方法や解説が整理されている点で展示しやすい分、新鮮味に乏しいという欠点があるが、本展では当館におけるアート作品の展示自体がほぼ前例のないことであり、驚きをもって鑑賞した来館者が多かったように見受けられた。

また、「デニムの耳」そのものに興味を持ち、衣料廃棄の現状を切実に受け止めた来館者がいる一方で、エコという視点を抜きにしてもアート作品として面白いという感想もあった。さらに、アート作品だけでなくもっと実用的な物に活用すればよい、そもそもデニムの耳を廃棄しない・作らない方法を考えるべきだという意見が少なからず見受けられた。これについては企画展の範囲を超えるが、今後制作活動や議論が発展していく可能性は十分にあり、然るべき時に再び展示等を通して紹介できるよう、動向を見守っていきたい。

(2) リサイクチュール

1) 概要

「リサイクチュール」とは、日本のファッションブランド「ゼチア」のLICA氏とNAKA氏が考案した新しい衣服再生の概念・方法で、両氏が1998年に始めた「トウキョウ リサイクル プロジェクト」の進化形として誕生した。「リサイクル」と「クチュール（仕立てる）」を合わせた造語で、単なる古着のリサイクルではなく、その服を着ていた人の思い出や記憶をデザインに織り込んで再生させるというのがコンセプトになっている。物質的なリサイクルも大事だが、それ以上に装うことの喜びを大切に、結果的に環境にも優しい服作りが目指される。

企画展のテーマを「布の再生」に決定した際、服飾美術学科の学生に不用になった服をリメイクして新しい服を作ってもらおうという構想は真っ先に浮かんだ。しかしながら、既に一般化しているリメイクでは、企画展の一コーナーとしてはインパクトが無いように思われた。そう考えていた折、新聞で「リサイクチュール」を紹介する記事³⁾を読み、その基本姿勢と、何よりも服を着る・作る喜びが感じられる作品に心を動かされ、展示に取り入れることにした。

作品の募集にあたっては、4ヵ月間と準備期間が短かったことと、ある程度の点数と作品の質を確保する必要があったため、服飾美術学科奥和代教授（当時）に学生への呼びかけと指導を依頼し、また制作にも参加していただいた。その結果、8名から共同制作を含む6点の応募があり、奥氏の制作品1点を合わせた、計7点のリサイクチュール作品を展示することができた。



8-a 左より 《ワンピース》松葉文那、《浴衣でワンピース》津久井里枝、《Line of Gothic & Mode》工藤静希(以上、服飾美術学科2年)



8-b 左より 《ベアバルーンワンピース》中村美智代(服飾美術学科2年)、《ちょっとレトロなジャケット&スカート》海老澤司乃、品地里美(服飾美術学科3年)、《制服でエコドレス》谷麻奈美、深尾早貴(服飾美術学科2年)

※所属は制作当時

写真8 学生のリサイクチュール作品

2) 制作および展示方法

作品募集の際、「リサイクルとオートクチュールの融合、“リサイクチュール”に挑戦してみませんか?」と呼びかけた依頼文兼募集要項を配布した。また、リサイクチュールを紹介した新聞記事のコピーを参考資料として添付した。

制作にあたっては、①古着や廃材を利用すること ②作業前に素材となる服の記録写真を撮影すること(事前に当館へ持参してもらい、館員が撮影)、③服にまつわる思い出、制作で苦労した点などをレポートにすること、を条件とした。①については、古着をベースに他の材料を組み合わせてもよいこととし、材料費は一作品につき上限一万円まで当館で負担した。また、折よく本学ファッションデザイン研究室から不用になった服地サンプルの提供があり、それらも材料として一部活用することができた。

展示作業は当館職員で行い、希望があれば制作者自身に手直ししてもらった。「デニムの耳アートプロジェクト」と同様に、質問[①最も苦労した点・見てほしい点 ②この企画に参加した動機 ③なぜこの服をリメイクしようと思ったのか?(服にまつわる思い出など) ④制作を通して、エコに対する考え方あるいは服作りに対する姿勢に変化はあったか?]に対する回答をパネル化し、作品解説とした。さらに、手を加える前の服の写真を作品の傍に置き、変化が一目でわかるようにした。



写真9
《パーティー・ドレス》奥和代作

3) 来館者の感想

リサイクチュールについては、学生からの意見が多かった。附属高校の制服を元にした作品もあり、特に高校生の興味を引いたように見受けられる。

[一般]

40代：学生さんのリサイクチュールはおもしろかったです。

40代：学校らしくおもしろかった。ショーをされると良いと思う。

50代：学生さんのテクニックとセンスは素晴らしいですね！

[本学学生]

造表1年：てっきり昔からの布ばかりだと思っていたので、現代の制服やリサイクチュールなどもあったのが意外でしたが、自分の趣味的なものだったので、見られて良かったです。

造表1年：学生作品展示もあり、他学科作品を見られたのは面白かった。

服美4年：服美の生徒の作品もたくさん飾られて、興味が湧きました。昔からのリメイクの仕方は様々で物を大切にすることの大事さを改めて知ることができたと思います。

高校1年：展示品はどれも古着のリメイクとは思えないくらい素敵でした。

高校3年：私も将来、何かを再利用してかわいい服を作りたいと思いました。

高校3年：元のデザインと全くイメージの違うものができていて、すごいと思いました。

服美4年：自分と同じ学生が作ったものということで、とても刺激になり良かったです。

文学3年：リサイクルして作ったドレスがとても可愛かったです。少し古くなってしまったものでも、それを使ってまたこのようになるなら、エコだし、かわいいし素敵ですね。

高校1年：大学生の方が作ったリサイクチュールがすごいと思った。あんな服も、こんなかわいくなるんだって感激した。

造表1年：学校の生徒さんの作品に心をうばわれました。シンプルだったドレスが少し手を加えるだけで魅力ある服に変身されていて感動しました。もっと作品がみたいです。

造表2年：日本人の「もったいない」の心が生んだ、美しい芸術だと思った。リサイクチュールの存在を知らなかったが、ゆかたなどの変わりように感動した。本来の柄も生きたデザインで、とてもすてきでした。

4) まとめ

企画展に合わせて作品の制作を依頼することは、初めてではないが、当館ではあまり例のない試みだった。作品募集の方法については、学生に参加の機会を平等に与え、企画展の存在をアピールする意味では公募やコンテストの方式が望ましいと言えるが、教員を通じて行ったことで、参加者を早い段階で確保でき、また予想以上に質の高い、面白みのある作品が集まった。

当初の予定では、リサイクチュールの方針通り、着られなくなった思い出の服をもとに制作することを原則としたが、「適当な服が見当たらない」「ハサミを入れる勇気がない」という理由から、古着を購入する学生もいた。また、今回は材料費を博物館で負担したが、まったく費用がかからなかった学生がいる一方で、上限の一万円をわずかながら超える場合もあった。リサイクル＝節約というイメージがあるが、気に入った物に作り替えるためには思いのほか費用がかかることが確認できた。

作品の制作を依頼する場合、当館の方針を明確に打ち出し、それを制作者に伝える努力はしつつも、そこから逸脱していくことを楽しみ、展示を作り替えていく柔軟な姿勢が大切だと痛感した。結果的に、リメイクやリサイクルとは一線を画す「リサイクチュール」の特徴を十分に伝えられたとは言い難いが、若々しく軽やかなデザインと、「リサイクチュール」という耳触りのよい言葉を結び付け、興味を持った来館者は少なくないはずである。

(3) 卒業制作品《sashico》

1) 概要および出展の経緯

平成20年度造形表現学科卒 松本咲恵氏の卒業制作品（造形表現学科非常勤講師 田中久隆氏指導）で、刺し子や菱刺しの装飾性に注目し、帽子、ブラウス、スカート、パンツ、バッグ、髪飾りにそれぞれ異なる模様を刺しつづっている。

本作品の制作にあたって、松本氏は伝統的な刺し子の技法や歴史的背景を調査する中で当館を訪れ、刺し子の仕事着や菱刺しの前掛け等の実物資料調査を行った。こうした経緯があって卒業制作展を見学した筆者は、《sashico》を目にし、刺し子を現代的にアレンジしたデザイン性の高さとともに、伝統的な刺し子に通じる根気と細かな手仕事に感銘を受け、出展を依頼することとなった。

2) 展示方法

当初は学生作品ということで第三部に展示する予定だったが、制作者が参照した伝統的な刺し子とともに展示する方が適当だと考え、第一部に展示することにした。

布を針で刺し綴っていく方法である「刺し子」「菱刺し」「こぎん」は、もとは布の補強や修繕、保温効果を目的として発達した技法だが、同時に、規則的な図柄の中に刺し手の思いや美への憧れが凝縮されたような装飾性が注目される。展示資料の中にも、刺し子で補修に補修を重ねたボロボロの仕事着もあれば、大正時代に晴れ着として身につけられた色毛糸による美しい菱刺しの前掛けもある。当初の計画では、「刺し子」「菱刺し」「こぎん」を技法ごとに分けて展示す



写真10 展示写真 右端が《sashico》

ることにしていたが、《sashico》と一緒に展示することになり、機能性を取り上げた「重ねて、刺して－仕事着」と装飾性を重視した「用から生まれた美」のテーマに分け、後者に《sashico》を配置した。これによって、現代にも通じる刺し子のデザイン性が強調されたほか、展示ケース内の配色といった展示映えの点でも効果的であった。

作品解説は、質問 [①最も苦勞した点・見てほしい点 ②なぜ刺し子をテーマに選んだのか？

③制作を通して、エコに対する考え方やアートに対する姿勢に変化はあったか？] への回答をパネル化した。解説の形式を揃えることで、位置的に離れている他の学生作品との統一感を持たせ、学生作品であることを視覚的に示した。

3) 来館者の感想

《sashico》への感想は具体的な内容が多く、制作者への励ましの言葉も見られた。

[一般]

40代：とても素晴らしかったです。特に松本咲恵さんの刺し子の作品には脱帽です。

40代：松本咲恵さんの解説にもありましたが、昔の人がいかに大変な生活をしていたか、また、その中で生まれた工夫のすばらしさに感動しました。

70代以上：感激しました。努力と成果に若い方に受け継がれている伝統の技術を見て、とても頼もしく思います。勉強を生かすお仕事をして下さい。

[本学学生]

高校1年：刺し子の細かさに驚きました。ぼうしのマークが雪のようでかわいかったです。

服美3年：刺し子がとてもかわいくてやってみたいと思いました。

4) まとめ

卒業制作展は多種多様な卒業制作品を一度に見ることができ、作品ファイルやレポートといった制作過程の紹介も充実している。博物館の展示のヒントを見つける意味でも足を運ぶ必要性を再認識した。

それに加えて、今回の《sashico》では、実物資料調査の協力という形で当館も制作過程に少しばかり関わることとなった。そうした上で完成作品を鑑賞するのは、制作者の工夫や解釈の仕方が如実に見て取れ、完成作品だけを見るのとは違った面白さがあった。資料調査協力・閲覧はもともと博物館の業務のひとつとしてあるが、学生の制作や研究の糧になるようさらなる利用拡大に努めたい。

4. 結果と考察－学生作品展示の効果と大学博物館の役割

(1) 学生作品展示の効果

学生の作品を展示するという事は、大学博物館にとって当然のことのように思われるが、アン

ケートや展示室での反応を見ると特別なことと受け止めた来館者が多かったようで、概ね好評価だった。ここでは、本展の学生作品展示を通して得られた反響、成果、また今後の可能性について見ていく。

1) 制作・発表の場として

まず挙げられるのは、本展が学生の制作および発表の機会となったことである。

「リサイクル」への参加動機のほとんどが、服を作りたいという気持ちは常々持っているが、なかなか自主的に取りかかることができないのでよい機会だと思ったからというものだった。古着を使う等の条件が課され、企画展展示という明確な目標があったことで、制作に着手しやすかったようだ。また実際に参加してみて、一から新しく服を作るのとは違った手間や工夫を要し、服作りの難しさや楽しさを改めて感じる事ができたという、授業では得難い経験をしたという声もあった。

「デニムの耳 アートプロジェクト」および《sashico》については、制作者全員が再び発表の場ができたことを喜んでいた。アート作品は、一度発表してそれきり出番がないことも少なくないとのことだが、展示ごとに新しい発見をして作品と制作者が鍛えられるという面があるはずなので、当館も発表の場の一つとして機能していくよう努めたい。

加えて、当館からの出品依頼を、制作指導に直接関わる教員とはまた異なる、第三者的な立場からの評価と受け止め、「光栄に思う」と口にする制作者の姿が印象的だった。このことについては、精神面・資金面での学生支援として、展示だけでなく、作品の購入・収蔵といった方法もあるという認識におよんだ。実際、「デニムの耳 アートプロジェクト」の作品購入を皮切りに、今後学生の作品をコレクションしていく構想が進行中であることを付け加えておこう。

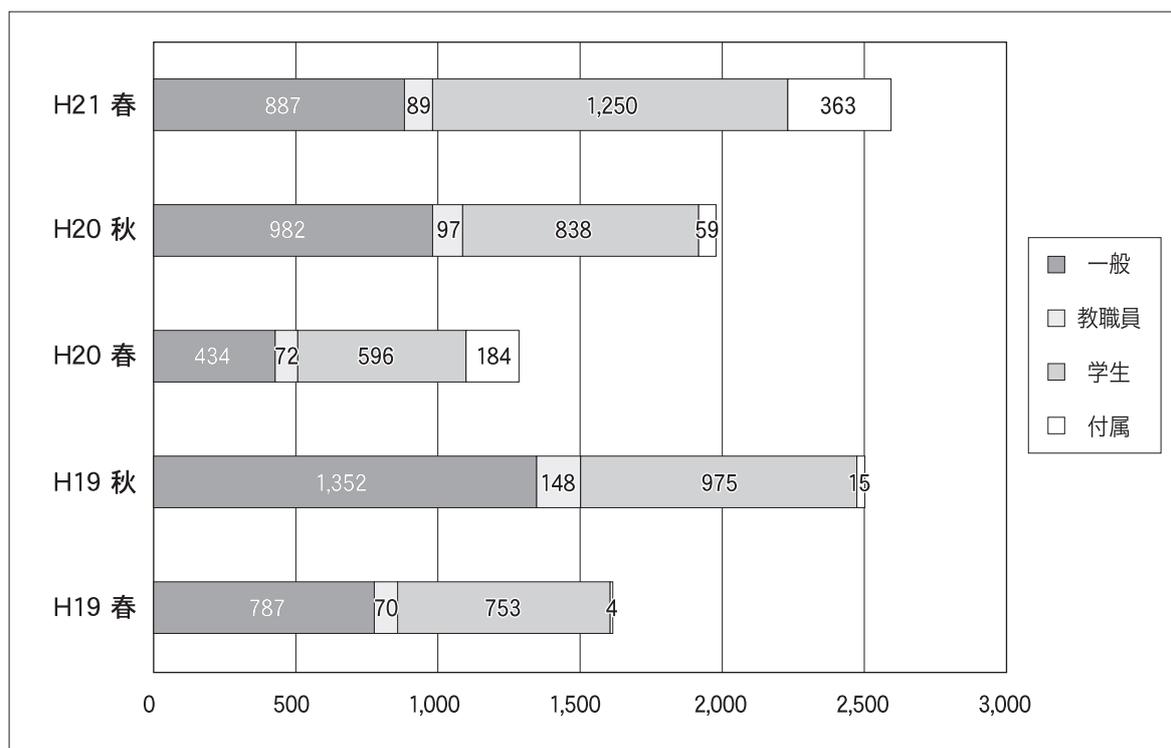
2) 学内の反応

目立った反応として「同級生や先輩の作品を見て大きな刺激になった」等の学生の感想があげられる。第一級の美術工芸品を展示することで鑑賞者に感動と活力を与えるというのは博物館・美術館の重要な役割だといえるが、学生作品のように、身近であるからこそ「自分もやってみよう」という動機づけになることもある。また、「普段目にする事のない他学科の作品が見られたのがよかった」という意見は、大学の一機関として、学科の枠を越えた展示をしようとする博物館の役割や可能性を示している。

さらに今回は、学生の入館者数の増加（表1, グラフ1）や授業見学・課題の利用増加が見られた。これについては、今年度からのワンキャンパス化によるところが大きく、また、環境問題を含んだ今日的なテーマが附属中・高の授業になじんだという理由が挙げられよう。それでも、友人の作品が展示されているからという理由で来館した学生や、博物館により親しみを感じたという意見が多かったことは、今後学生の利用拡大を考える上で重要である。

表1およびグラフ1 企画展 入場者数 内訳

年度	タイトル	一般	教職員	学生	付属	計	日数	一日平均
H19 春	「糸の造形・日本刺繍」	787	70	753	4	1,614	19	84.9
H19 秋	「影と色彩の魅惑 ワヤン」	1,352	148	975	15	2,490	26	95.8
H20 春	「わたしの服・ぼくの服」	434	72	596	184	1,286	20	64.3
H20 秋	「手技の美・絞り」	982	97	838	59	1,976	25	79
H21 春	「布、再びみたび」	887	89	1,250	363	2,589	26	99.6



3) 学外の反応

一般来館者からは、「家政大らしい展示だった」との声が多かった。「家政大の学生がどのようなことを勉強しているのか分かった」「若い人が真剣に物事を考え実践しているのを見て頼もしく思った」という感想が寄せられ、学内の研究・制作活動の一端を紹介できたという実感を持った。

展示だけで終わらせず、ファッションショーをしたり、商品開発したらよいという意見もあった。こうした声に応えるのは容易ではないが、何か「今後」につながるネットワークを作り、その中で博物館が機能するような方法を考える必要性を感じた。

また今回は、来館者アンケートに書かれた意見・感想の抜粋を制作者に伝えた。特に、普段接する機会の少ない世代からの意見は、制作者にとって新たな発見や励みとなったようだ。一般公開している企画展は、様々な人に作品を見てもらい反応を確かめることのできる絶好の機会である。今回は実現しなかったが、制作者自身による作品解説等、制作者と鑑賞者が直接交流できる場を設けることを今後の課題としたい。

(2) 大学博物館における学生作品展示の意義

ここでは、「布、再びみたび」展における学生作品の展示を、「大学博物館」の役割と照らし合わせてみたい。大学博物館における展示は、一般の博物館・美術館の展示と、あるいは卒業制作展や学生自身によるファッションショー、個展、グループ展とは違った意義や役割を持っているのだろうか。

西野嘉章著『大学博物館』によれば、「大学博物館の基本的な立脚点は、学内における教育研究の成果や内容をなんらかの博物学的な手段でもって分かり易く伝達すること」⁴⁾とある。学生の制作品は間違いなく「学内における教育研究の成果や内容」である。それを「博物学的な手段でもって分かり易く伝達すること」に博物館での展示の意義があるだろう。「博物学的な手段」には、資料の扱いや展示方法等さまざまな要素が含まれるが、ここでは博物館事業のうち「特別展示」について書かれた箇所を参照することにする。

「大学博物館は、様々な領域にまたがる専門研究者や技術者の知識や技術を活用し易い環境にある。・・・大学博物館における研究は、学部単位、学科単位、研究所単位の研究ではなし得ぬ超域的な広がりを持ち得るものとなり、その過程と成果を展示する試みは、間違いなく、また別な研究プロジェクトの起爆剤となるはずである。」⁵⁾

当館は、今回のような教員を通じた学生への制作・出品協力等、大学の附属機関である利点を様々なレベルで享受している。ただ、研究者としての教員の実績や学生の活動を広く知っているとは言えず、大学の持つ知識や技術を十分活用するには至っていない。そのためには、学内外の動向に目を向けつつ、協力を依頼するにあたって博物館としては何ができるかという姿勢と実力を示すことが必要であろう。

さらに西野は、上記のように大学博物館がその役割を発揮できれば、「これまで専門性の名のもとであまりに細分化されたがため、総体として弱体化しつつある学術研究に、自然や人間や環境などその全体においてしか捉え難い様々な課題に対処し得るような視点や論点をもたらすことも可能になる。」⁶⁾と述べる。

この「自然や人間や環境などその全体においてしか捉え難い」ものを扱うのが、まさに人間の生活を考える家政学であり、「家政」大で学ぶ意義は、専門分野ごとの各学科に分かれていても、あるいは文学部であっても、人間の暮らしの諸相を広い視野で眺める家政学的な視点を養うことにあるといえるのではないか。

そのような意味で、本展において、近接領域とはいえ服飾美術と造形表現という異なる学科の作品を同時に展示できたこと、環境教育学科や附属中・高の授業で見学利用が多数あったことは、学科や専門分野の枠にとらわれない、より総合的な学びの機会を博物館が提供し得ることを再確認するきっかけとなった。

さらに、環境問題を生活に引きつけて考え・行動する「エコロジー」の文脈の中で学生の作品を

展示できたことは、彼女たちの研究や制作の成果に違った光を当て、結果的に家政大の特色を現した、「家政大らしい展示」という評価につながったといえよう。

5. おわりに

学校の財産は学生であるという話を耳にしたことがあるが、「布、再びみたび」展の学生作品展を通して、それを言葉どおりの意味で痛感した。展示という行為の性質上、当館の企画展は、造形表現学科と服飾美術学科に関するテーマが中心で、学生との共同作業も両学部の学生に限られがちだが、今後は展示のテーマに広がりを持たせるとともに、制作の他にも学生との共同作業の機会を見出し、大学の博物館としてより多くの学生と様々な形で関わられるよう努めたい。

最後になりましたが、本展の開催にあたり作品を制作・出展して下さった学生・卒業生の方々、制作指導や連絡等で多大なご協力をいただきました本学服飾美術学科元教授奥和代先生、造形表現学科教授藤岡薫子先生、岡本恵先生、田中久隆先生に厚く御礼を申し上げます。

註

- 1) 当館では、企画展の際に「学生用」と「一般用」に分けたアンケートを作成し、来館者に手渡しして、展示や運営に対する意見・感想を募っている。本稿で来館者の感想、意見として紹介するものは、ほぼ来館者アンケートの自由記述欄によっている。なお、今後アンケートの集計結果をホームページで順次公開する予定である。
- 2) 「デニムの耳 プロジェクト」については、DENIM no MIMI PROJECT ホームページ <http://www.denimnomimi.com/index.html> に詳しい。
- 3) 毎日新聞 2008年7月11日 東京朝刊 「モードの話」。
- 4) 西野嘉章, 大学博物館－理念と実践と将来と, 東京大学出版会, 1996, p48.
- 5) 西野嘉章, 大学博物館－理念と実践と将来と, 東京大学出版会, 1996, p43.
- 6) 西野嘉章, 大学博物館－理念と実践と将来と, 東京大学出版会, 1996, p44.